

# 宇都宮市 もったいない運動



宇都宮市  
環境政策課 エコ活動グループ 佐藤様

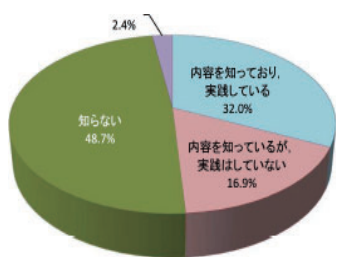
4班 コミュニティデザイン学科 岩崎颯太 石川絢萌  
社会基盤デザイン学科 飯塚絵里名  
建築都市デザイン学科 川上渉 高橋成志

## 背景

宇都宮市が行っているもったいない運動とは、「ひと・もの・まち」を大切に作る心を広める運動である。

しかし、宇都宮市が令和元年度に実施した「もったいない運動」の認知度調査において、30代・40代の認知度が低いことが明らかにされており、若年層には、認知はされてきているものの実践率が低いのが現状である。私たちは、30代・40代の認知度向上のために実際のもったいない運動を若年層に実施してもらい、その実施状況をまとめたパンフレットを作成することにした。

〈令和元年度実施の認知度調査〉 〈もったいない運動の取り組み〉



## 目的

もったいない運動が広まらない理由として、もったいない運動が広範でイメージしにくいことが挙げられる。そこで、調査を通じて、もったいない運動について考えをおすきかけにしてもらうという「アクションリサーチ」的な手法を採用することにした。もったいない運動を知らない人が意識せずにもったいない運動を実施していることも考えられることから、それらの人々にもったいない運動を実践していることを認識させ、他のもったいない運動の促進につなげることも目的とする。また、新たな提案をするために、もったいない運動の実態調査を行う必要があると考え、これにより市民の意識や認知、実践度を調査したいと考えた。

## 方法

もったいない運動の認知度・実践度向上のために年齢層ごとに異なる方法をとった。

10代・20代向けには、もったいないを身近に感じてもらうことで日ごろの意識を高め、実践度の向上を図るため観察調査を行った。実際に行った調査内容としては、大学生を対象に普段の生活の中でもったいないと感じた瞬間や、実際に行っているもったいない運動の様子などを写真に収めて送ってもらった。また、調査協力者には、もったいない運動に対する意識やもったいない運動を実践してみてもその意識がどう変わったかというアンケートを実施した。

30代・40代向けには、大学生に実践してもらったもったいない運動の観察調査から作成したパンフレットを通してもったいないについて再考してもらい、さらに背景にも挙がっていた認知度の向上につなげようと考えた。

## 分析結果

今回の調査全体を通して言えることは、昨今のコロナウイルス感染拡大の影響もあるためか、外出先よりも家の中での写真が多かった。今後もステイホームは継続する見込みであることから、家の中で行えるもったいない運動に目を向ける必要があると考えられる。

観察調査で提出された写真の中では、食品に関するものが最も多かった。これは「食べられるかもしれない」と感じているものを、

実際に自分の手で処分していることから、「もったいない」と感じやすいのではないかと考えられる。

次いで多かった電力については、無意識に消費していることが多いため食品より少ない結果となったと考えられる。

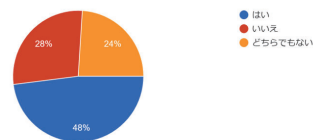
ほかにも、リサイクルやゴミの分別の写真も提出された。もちろんリサイクル自体ではなく、リサイクルできるものを捨てることももったいない、と捉える人がいた。一方、たとえリサイクルできる物だとしても物を捨てることにもったいないと感じる人もいた。これは少なからずその物が使えるという気持ちがあったのだと推測する。正しく分別しごみを出すことももったいない運動につながることを周知する必要があると感じた。

また、もったいない運動に対する意識についてのアンケート結果から、実践する前と後でもったいない運動に対するイメージが変わったと答えた人が多かった。このことから、実際にもったいない運動を実践することは、身の回りの「もったいない」について考えるよいきっかけになるのではないかと感じた。

〈提出された写真の例〉



〈イメージに対するアンケート結果〉



## 提案

宇都宮市民に対し、もったいない運動を勧める成果物（パンフレット）を作成し、宇都宮市役所もしくは、コミュニティセンター、もったいない運動を理解していただいている民間の店に展示していただくことを提案する。この成果物は、目的にもあるように30代・40代の宇都宮市民に対し、「もったいない運動とは何か」、「どんなメリットがあるのか」を伝えることで、持続可能な都市「宇都宮」の実現に近づけていこうというものである。

調査結果より、食品に関する「もったいない」や電力に関する「もったいない」が意識されていたことを受けて、私たちが30代、40代の市民に向けて作成する成果物に、捨ててしまうが食べられるかもしれないと思う食品の部分を使ったレシピを紹介するとともに、無意識に消費してしまいがちな電力に関しては、今日から実践できる環境にも家計にも優しいもったいない運動を紹介することを提案する。

人によって価値観は違うため、もったいないと感じる事象は人によって大きく違うことが今回の調査で分かった。もったいない事象に気づけていない人に「もったいない」を指摘することで環境や有限資源に対する意識を変化させることができるだろうと考える。

〈実際に作成したパンフレット〉

